

語法上の虚實の概念をめぐつて

内 藤 正 子

一、品詞の上位概念としての虚實

中國語において、語を“實字”と“虛字”に分かつ法は、近代西歐文法の輸入以前から見られる傳統的分類法である。

もともとは、宋代の詩論に始まるとするこの虚字實字の

概念は、後に語を“實體的概観”を表わすか否かにより、“實詞”と“虛詞”に二分する語彙論的分類法に整理されていった。特に虚字についての研究は、その文中における役割の重要性から早くに論ぜられ、助字研究と相俟つて、「馬氏文通」以降、多くの文法家が、このように虚實の概念を品詞の上位分類として取り入れたわけであるが、しかし各文法家の扱い方を見てみると、分類の基準、具體的な内容等、時により人により一致せず、現在に至るも統一を得ていない。一つには、傳統的用語であるため、その指す所もともと必ずしも明確でなく、又一つには、各文法家の依つて立つ

等を解説するにどまり、語彙論としての枠を越えたものではなかつた。その後、近代西歐文法が取り入れられた後は、

本稿は、こうした馬建忠以降、主な文法家の“虚實”的文

法論への導入のし方及びそこから生じる問題點を、その理論との関連において、追求してみようとするものである。

虚實二分制を、單に品詞の上位分類として、分類の爲の分類として論ずるのではなく、各文法家の虚實の概念を整理してみる事により、新たな文法上の問題を浮上させようとする試みもある。

なお、ここで取り上げる文法書は、「馬氏文通」以降主な文法書の中で、虚實分類を取り入れているもの、又最近のものについては、それがどれほど規範的な意義を持っているかわからぬが、最近の扱い方の一例として取り上げてみた。

二、各文法書の扱い方

① 馬建忠「馬氏文通⁽³⁾」

正名卷之一「界說」に言う

凡字有事理可解者曰『實字』。無解而惟以助實字之情態者、曰『虛字』。實字之類五、虛字之類四。
さらに、實字として、『名字』『代實』『動字』『靜字』『狀字』を挙げ、一方虛字としては、『介字』『連字』『助字』『嘆字』を挙げる。實字、虛字を“有解”か“無解”かにより區別し、虛字を意味を持たない、實字を助ける作用しかないも

のとして定義づけたわけである。

この實質的意味を持つかどうかという基準は、後に多くの文法家が採用したものであるが、特に代名詞や副詞の扱い方をめぐって、見解の別れる所となつた。

② 呂叔湘・朱德熙「語法修辭講話⁽⁴⁾」

虚實の分類というより、品詞そのものについて、それほど詳しく述じてはいない。取り上げた基準は意味によるもので、名詞・動詞・形容詞を“意義比較實在些”として實詞、代詞・副詞・連接詞（和・的・得・但是等）・語氣詞を“意義比較空靈些”として虛詞に入れた。但、副名詞（量詞）・副動詞（把・被・從・對子・等）、さらに數詞の一部も虛詞であるとする。

「中國文法要略⁽⁵⁾」では、實詞虛詞ではなく、“實義詞”と“輔助詞”に分ける。實義詞は名詞・動詞・形容詞の三類、輔助詞は限制詞（副詞）・指稱詞（數詞・量詞を含む）・關係詞（之・的・所・者等）・語氣詞の四類とした。分類の基準は、「語法修辭講話」の意味による判別に加え、實義詞の方は“都能在我們腦筋裏引起具體的影象”，輔助詞の方は“可以幫助實義詞來表達我們的意思”と、それぞれの性格を定義づけた。そして、同じ輔助詞でも意味の具體性の程度により、さらに

分けられるとした。

(3) 張志公「漢語語法常識」⁽⁶⁾

“代表各種事物的概念的”を實詞、“具有語法作用的”を虛詞とする概念により分ける考え方である。名詞・指代詞・動詞・形容詞・數量詞を實詞に、繫詞・副詞・介詞・連詞・助詞・嘆詞を虛詞に入れた。

同じく張志公による〈談虛詞〉では、概念を表わすか否かという基準に加えて、さらに、實詞は“單獨一個實詞、在適當的環境裏可以回答問題或是提出問題、成爲句子”という syntactic な基準を持ち出して、虛詞との境界を明確にしようとしている。

(4) 陸志韋編「北京話單音詞彙」⁽⁸⁾

虛詞・實詞について具體的な分類をかかげはいないが、從來の學者が虛字に入る代名詞・副詞・感歎詞・問答詞はすべて虛字とは呼べないといふ。實字についての定義はないが、虛字について、"的・着・罷那"一類的格式中國人叫做"虛字"、"虛字"沒有定義"と言ひ、さらに、虛字と呼ぶのは、それ自體は獨立した意義を表わさず、他の"語言格式"の關係・程度或いはその他の作用を表わすだけであるからだとする。虛字として具體的に挙げたのは"作用詞"である。作用

詞をさらに、引起詞・聯接詞・語助詞に分けた。いわゆる介詞・連詞・語氣詞の類である。

なお、指代詞・副詞について、特にコメントはないが、上記の點から見て、實字に入れるものと思われる。

(5) 王力「中國現代語法」⁽⁹⁾

やはり、概念を表わすか否かにより分ける。

“凡詞本身能表示一種概念者、叫做實詞”

“凡詞本身不能表示一種概念、但爲語言結構的工具者、叫做虛詞”

また、詞を“理解成分”と“語法成分”とに分け、實詞は“理解成分”に屬するもの、半實詞・半虛詞・虛詞は“語法成分”に屬するものとする。半實詞・半虛詞といふのは、王力獨自の範疇で、副詞を半實詞、代詞と繫詞(是・像・似等)を半虛詞と呼ぶ。

概念を軸に、名詞・動詞・形容詞・數詞を實詞へ、連結詞・語氣詞・記號(附加成分)を虛詞へ分類したわけであるが、副詞や代名詞は、概念という基準では容易に位置づけできな事を物語るものであろう。

「中國語法理論」も、定義・分類のし方等同じである。さらに、それぞれの再分類について、實詞は概念を基に、虛詞

は文中における役割を基にすべきだとする。

「漢語語法綱要」⁽¹¹⁾は、實質的な意味を持つか否かによって二分する。實詞・半實詞・半虛詞・虛詞の指す範疇は「中國現代語法」と等しいが、但ここでは“記號”を虛詞から除いている。

⑥ 高名凱「漢語語法論」⁽¹²⁾

高名凱は、中國語に虛實の分類のみを認め、實詞の下位分類としての品詞分類を認めていない。⁽¹³⁾従つて、實詞・虛詞それぞれの指す範疇も獨自の用語によるわけだが、まず“語法意義”を表わすものが虛詞、“詞匯意義”を表わすものが實詞であるとした。そして實詞と虛詞を分ける基準については、それが“基本的意義”を表わすか、それとも“關係的意義”を表わすかという本質的な區別によるものだとした。つまり意義による分類である。

それぞれの指す内容については、“具有名詞功能的詞”“具有動詞功能的詞”“具有形容詞功能的詞”的三類を實詞に舉げ、虛詞は、“代表虛詞”“範疇虛詞”“結構虛詞”“口氣虛詞”に分け、指示詞・代詞・數詞・系詞・連詞等實詞以外の類を入れる。代名詞・副詞に加えて數詞をも虛詞の範疇に入れる獨自の分類法となつた。

語法上の虚實の概念をめぐって（内藤）

⑦ 「漢語知識」⁽¹⁴⁾

實質的な意味を持つか否かによる基準の他に、さらに單獨で用いて、問い合わせに對する答えとなるか否かという基準を加えた。虛詞については、さらに“有幫助造句的作用的詞”という定義づけをする。

概念による分類の他に、syntaxにおける基準を持ち出した張志公の考え方と同一線上に立つものである。

具體的には、名詞・動詞・形容詞・數詞・量詞・代詞を實詞へ、副詞・介詞・連詞・助詞・嘆詞を虛詞へ入れる。

⑧ 陳望道「文法簡論」⁽¹⁵⁾

概念或いは意味により分けるのではなく、“組織中的功能”によって分ける。つまり、單獨で文の要素となれるかどうか、“自立詞”か“他依詞”かという基準で分けるべきだとする。實詞と虛詞は、どちらも意味を持ち、文法成分である事に變わりはないと言うのである。

そして、具體的には、介詞・連詞・助詞を虛詞とし、それ以外を實詞とした。但、感詞は、文中に插入する事も可能であるが、普通文中ではそれ以外の要素にはなれないとして、實詞・虛詞の範疇の外に置くとした。

分類の基準として、概念や意味を捨て去り、syntaxのlevel

のみにしばった分類法である。

⑨ 鄧福南等「漢語語法新編」⁽¹⁶⁾

最近出版された本であるし、現在中國でどのように使われているのかもわからないが、虛實の扱い方に少し變わった點も見られるので取り上げた。

分類基準としては、"單獨充當句子成分" を實詞、"不能充當或不能單獨充當句子成分、只能表示語法關係或語法意義" を虛詞としており、基本的には「文法簡論」の考え方と同じである。變わっているのは、實詞の範疇の中に、副詞・代詞らとともに象聲詞（唉・哦・呼呼・嘩嘩等）をも入れた點である。

陳望道は、"感詞" の處理に際して、實詞・虛詞どちらにも入れずという扱いをしたが、ここでは、特殊な實詞であるというコメントをつけてはいるが、實詞の中に入れたのである。さらに、"詞素" という level で、實質的な意義を持つか、それとも附加的な意義を持つかにより、實詞素・虛詞素という分け方を採用している。

III' criterion をめぐる問題

以上を整理してみると、まず分類の基準としては、I 概

念・意味により分ける。II 單獨で問い合わせに對する答えとなれるかどうかにより分ける。III 單獨で文の要素（句子成分）になれるかどうかにより分ける。の三つが採用されている。

I は當然の事ながら、ほとんどの文法書が取り上げている。②語法修辭講話 ③語法常識 ④北京話單音詞彙 ⑤中國現代語法 ⑥漢語語法論 ⑦漢語知識 の他に、⑩漢語詞匯講話（周祖謨 人民教育出版社 一九五九）⑪語文知識講座（虞群 天津人民出版社 一九七五）も同じ觀點に立つものである。この中で、さらに虛詞について定義づけをしたものは、⑥と⑩—語法意義、③—語法作用、⑤—語法成分である。

この基準は、「馬氏文通」以前の虛實についての傳統的な解釋に則っており、最も一般的な分類基準であるのは言うまでもないが、問題は具體的な分類である。

「馬氏文通」は、代名詞・副詞をどちらも形容詞とともに「實字」として扱ったが、その後の文法書は、ほとんどがこれと異なる扱いをしている。上に舉げた文法書の中で、③・⑦・⑪は代名詞を實詞に、副詞を虛詞に入れるが、②と⑥はどちらも虛詞に、④はどちらも實詞に入る。代名詞は、意味から見れば實體はないわけであるから、虛詞に屬すると言えようが、こうすると、名詞と非常に似た性格を持つにもか

かわらず、異なる範疇に屬してしまうことになり、この分類の効用から見て、意味がなくなってしまう。副詞は、人により考え方が異なるというよりも、副詞自體、實詞に入れた方が良いもの、虛詞を入れた方が良いもの、どちらもあるといふ問題であろう。(5)が、別に半實詞と半虛詞という範疇を立てて處理した理由も、おそらくここにあると思われる。

「上來」、「下去」、「起來」、「出去」等のいわゆる趨向動詞についても、同じ事が言える。これらを趨向動詞（漢語知識）とするにせよ、助動詞（漢語語法常識）とするにせよ、既に動詞としての意義を失ってしまったものを實詞の範疇に属するものとするには、やはり問題があろう。

結局、概念・意味により分かつと一概に言つても、實際の分類で、この基準が客観的基準とは言えないという事になるであらう。この基準による分類の限界もここにある。

次に、IIの單獨で問い合わせる答案となれるかという基準は、Iの基準では解決できない問題を、syntax の level での基準を持ち出して来る事により、處理しようとしたものである。これを取り上げたのは、(3)と(7)と(10)であるが、代名詞を實詞、副詞を虛詞とした分け方で、一致する所となつた。實はさらに検討すれば、副詞にも「不」や「也許」のように

語法上の虚實の概念をめぐって（内藤）

単獨で答えとなれるものもあり、理論的には問題は残るのであるが、實務的な處理方法としては、役に立つものと言えよう。

同じ syntactic な基準でも、「單獨で文の要素となれるかどうか」という事になると、分類が變わって来てしまう。今度は、代名詞も副詞も實詞に入る事になる。

この基準を取り上げたのは、「文法簡論」と「漢語語法新編」であるが、その他に「語法常識」も「虛詞不能單獨的作爲句的基本成分」という形で出した。副詞は状語となれるので、この基準では實詞に入れるべきなのだが、「語法常識」はIIの基準を主にした爲であろうが、副詞は虛詞として扱つた。この基準によれば、代名詞・副詞については一致するのだが、嘆詞・語氣詞の類について問題が残る。「文法簡論」と「漢語語法新編」で處理を異にするのは、既に述べた通りである。

以上検討していくと、どの基準をとってもすつきりと二分するのは難しく、あえて明確に區別をつけようとすれば、品詞論と同様、分類の爲の分類或いは循環論 (circularity) を引き起こしてしまう。

但し、一つ、以上の分類法を扱う上で問題にしたいのは、ほ

とんどの文法書に、異なる level の基準が錯綜して取り入れられてゐるという點である。意味にせよ、概念にせよ、この基準は、semantic criterion であるから、syntactic criterion など、扱ふ level が異なるはずである。それぞれ criterion の境界を踏みえた上で、論ずる事が必要であるといふ點である。

れども、實詞は概念で分類できる、虛詞は文中における役割（功能）で分類できるというのは、それぞれの下位分類の基準であつて、虛實そのものの分類基準とはならないのである。

四、虛詞とは何かという問題

さて、ここで虚實の分類基準とは別に、虚詞とは何かといふ事を少し考えてみよう。

石安石は〈甚麼是漢語虛詞〉⁽¹⁷⁾の中で、虚詞について、『虚詞か虚詞かの區別も自ずから異なつてくる。單獨で問い合わせになれるか』という基準では實詞になるのだが、どうも他の實詞とは異なる何か主觀的なもの、mood が残つているように思える。關係語としての虚詞とは當然異なるが、語氣や感嘆を表わす虚詞とは、むしろ非常に近い性格を持つようと思われるるのである。これは或いは、歴史的に、明清以前は、虛字（助字）は主に嘆詞の類を指しており、明清期になって、

奮闘・把書拿過來である。この分類そのものは、張志公〈談虛詞〉と同じ觀點に立つものであるが、こうした作用と、『表示說話的語氣』と『表示感嘆』の一いつの作用を分けて取り上げた點が注目される。尤も石安石は、これについて特に論じてはいないのだが、同じ虚詞でも、語と語の關係を表わす虚詞と、語氣や感嘆を表わす虚詞とは、一緒に括ってしまふことができない、性格を異にするものではないかという気がするのである。

たとえば、いわゆる能願動詞について。“能” “可以” “應該” “敢” 等については、これらを何と呼ぶかについても未だ統一見解を得てない問題である。「語法常識」は英語の must や can に従つて助動詞とし、「中國現代語法」は副詞に入れ、「文法簡論」は獨自の用語 “衡詞” と呼ぶ。従つて、實詞か虚詞かの區別も自ずから異なつてくる。單獨で問い合わせになれるか」という基準では實詞になるのだが、どうも他の實詞とは異なる何か主觀的なもの、mood が残つているように思える。關係語としての虚詞とは當然異なるが、語氣や感嘆を表わす虚詞とは、むしろ非常に近い性格を持つようにならでいるといふ點である。意味にせよ、概念にせよ、この基準は、

限定、修飾或いは補充の關係（我的・書・拼命地・干）、聯合の關係、動作や性狀を表わす語と他の語との關係（爲新中國國

主に關係語を指すものとなつたという助字意識の變遷と關連する問題かもしだい。

こうした問題については、又別の機會に論じてみたいが、最後に、最近の虛詞解説書が虛詞の範圍をどこまで取り入れたかについて触れておくと、「現代漢語虛詞例釋」⁽¹⁹⁾は、基本的には、副詞・介詞・連詞・助詞・語氣詞であるが、一部代名詞（各・每・其等）も含める。「現代漢語虛詞」⁽²⁰⁾は、以上の他に「詞頭」「詞尾」も含める。實用書としての性格から、嚴密な定義づけをせず、比較的廣範圍に扱つているようである。

〔注〕

- (1) 青木正兒「虛字考」京大『中國文學報』第四冊 一九五六
- (2) 盧以緯「助語辭」、王引之「經傳釋詞」、袁仁林「虛字說」、劉淇「助字辨略」等
- (3) 「馬氏文通校注」（世界書局）に依る
- (4) 中國青年出版社 一九五二、一九七九
- (5) 商務印書館 一九四四、一九五一
- (6) 新知識出版社 一九五七
- (7) 『語文學習』一九五三年第二三期
- (8) 科學出版社 一九五六
- (9) 中華書局 一九五九、一九七七

- (10) 中華書局 一九五五
- (11) 王了一、上海教育出版社 一九五七、一九八二
- (12) 科學出版社 一九五七
- (13) 高名凱「語法範疇」語法論集第二集 一九五七、〈關於漢語的詞類分別〉漢語的詞類問題 一九五五
- (14) 初級中學「漢語」課本改訂本 人民教育出版社 一九五九
- (15) 三聯書店 一九七八
- (16) 湖南教育出版社 一九八三
- (17) 『語文學習』一九五七年三月號
- (18) 牛島德次「助字考」東京教育大學文學部紀要「國文學漢文學論叢」一九五六參照
- (19) 北京大學中文系 一九五五・一九五七級語言班編 商務印書館 一九八二
- (20) 華南師範學院中文系「現代漢語虛詞」編寫組 廣東人民出版社 一九八一